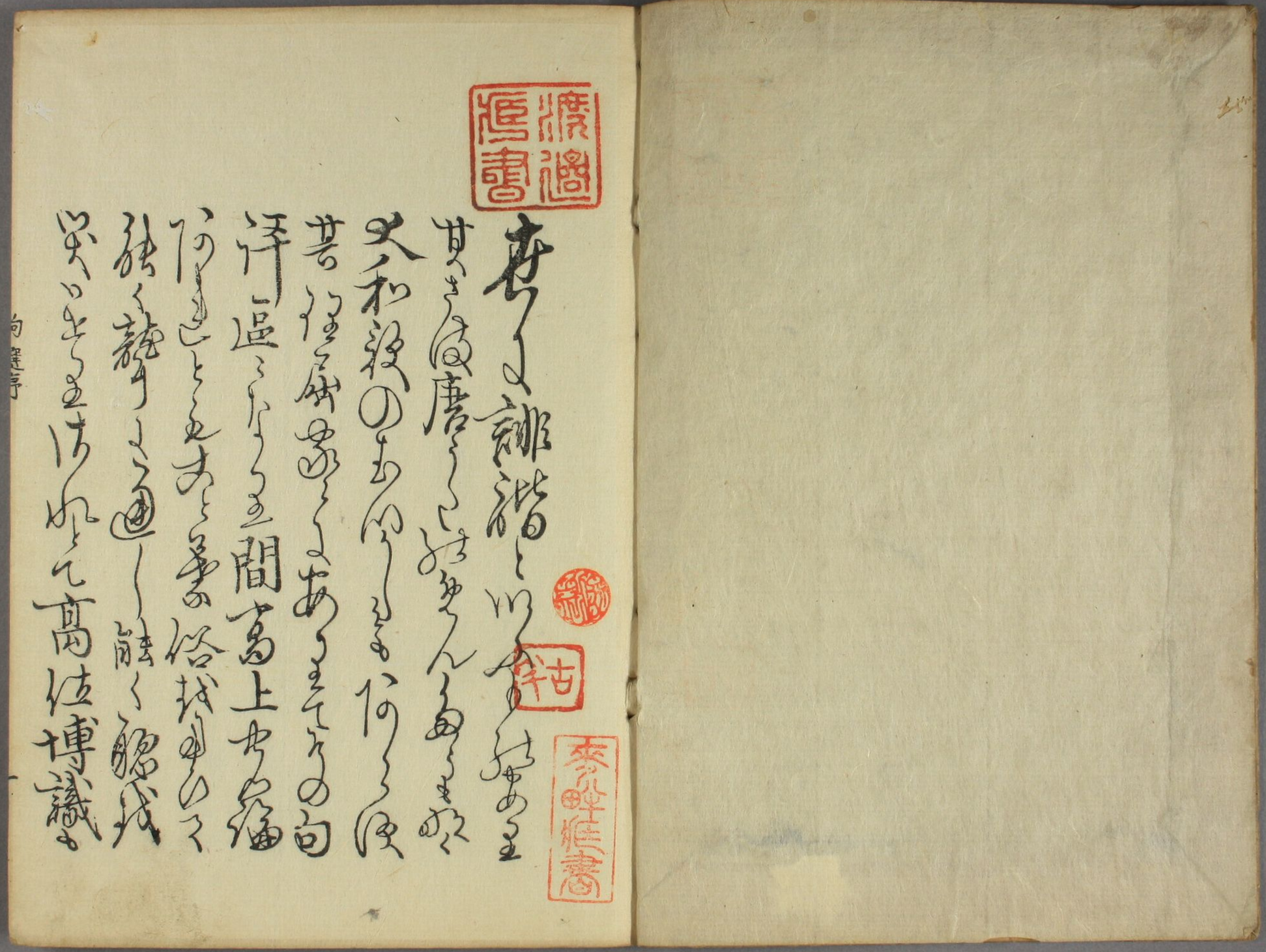
芭蕉句選

上

中村俊定文庫
文庫 18
248
1



渡邊文庫

古洋

東京大学総合図書館

尚絅亭

自在なる風賊を極まる
世界を書とする是を以て是れ
男子の高雅の業なるべき
彼なほく 水島嚴を識
といふる類なんさよ自享元禄
の頃より俳風はじまりしかども文
時ひとり向はれ試みる森青蘿
西上人の意をもつぱら杜鵑門。

傷ましさ五七五簡言にして
あはれなるひとすじの心を感じ
此要をもつて風圏の宗匠
泊船集をもつての是をも
文章に發し紀行俳諧の手ばかりを
為すべきもの貴賤を我
堂にして和合百三十余句を
以て拾遺集を撰ばせ

古しの春秋はいつまでも命
毛もからぬほどの葉を四季を
わかち附して雑の句を続ねて
名付けて道蕉句選と題して既に
夕に是坤圏すなはち成るを蕪の
の情捧けめ成は哀別の意を
すゝむ不可をも当自無我
解のうち六時の四季の伴ま

ゆゑに我観を彼乾坤無住の
道も自ら二人とはれば入りしまた
の来ることなく及ぶやうに梓に
らせ部として雪の花をそへて
同志の友に追加我をふまへ
風雅の例となしたりて後も
五老井の識るところなりて述而
不作信而古へ将好といはん

惟昔之成手於蓬生の
[illegible]紀の宮[illegible]りしのみを[illegible]ふる
日擲葦菴主人自序

凡例

一四季の類を大概玉海集に準ず小擬
ひを事とする雜を其季の末に載す
一連歌は月ひさしき題は愚意をもつてせく
を部の所々に記す
一月花はひとり句を句意を量
る雜は部に入れ
一此集に引用する書目写なれども烏

焉馬乃誤りを正す

一 此集衆人の見る所後校合の委しかさるを知因て再校し粗その誤を補て猶後人の参考に供す

京都帝国大学図書

春之部

蓬莱の島は伊勢物語に侵事も猶しらせ度猿の面之日ハ田毎の月ハ高しられ

誰ゆゑの峰の桜ぞ問人に答ハ雲の花ぞ散ける

越人鶯尾冠を去て仙合に入る彩毫

中村家定文庫

二日ゆきぬるに世ちかき花さくを

湖水にうかぶ蓬ヶ嶋をながめて

三日開口　題四日

又清水に詣で侍るのちなれば仏

前菖蒲よりはつかに素うりの茎

一とせに一度逢まさりなる川ふ哉

其立て侍る九日は野ゆかぬ

まあれば名ある山の朝霞

大日枝也　一枝引折て一ふり

うり見せ侍る梅ゆ巣ちる梅はな

大日枝也　山の名とあるよりほかの人ゆ巣ちる梅ゆ巣ちる梅ゆ巣ちる

うり見せ侍る梅はなの一枝の

梅ゆ香ふの山と日ぬ出る春の路ふ

山里をいとゆ歳ゆ行ぬ乃花

人も見ぬ巣也かくれ侍ぬ梅

春も〻て言葉ゆ成ぬ日と梅

梅白しゆ巣ゆ也野ゆ遠ゆ

子ゆ宿の後ゆ梅ゆ行ぬ

咄ゆ巣ゆ行ぬ梅の言

餞ゆ州東武行

梅若葉ゆ巣ゆ宿の行汁

細代武神社恵之意

梅の木ふかくやむ社ふる木やむ社ふる

古くのけしきもすに梅の花

旅のくさを吉野を梅よ家にうら

梅園の亭

暖窓の奥をのゝ北乃春

門人伊うみちのくふるを

るのさるおもて

家るのよ最の中なる梅の花

防川亭

爰のふ文よい発ると

ある

香梅さくら梅うゝ梅ふる好諸

子芸ゝよ梅おのゝ世半乃兼

重ふ白へ芸毎かる国ふ梅ふ花

何ゝ新八多海ゝ主ゝる一国忘ふ

又梅花海へ一歳爰ふ古く

ふゝて好俳立さ四殿の花と

好ゝ梅の屋新ゝ

梅ゝ重ふ梅ゝ好一字ふのゝ梅ふ

ゝふ梅ゝ四意作るゝ梅ゝ

凍ゝけふ筆に波千を清ふ

初午や狐の剃り跡あらはれ
涅槃会や鍛冶金とる珠数繋ぎ
伊勢参り
神々も思ひもうけぬ涅槃像
不性なる武蔵野の雨
雨や蜂の巣はふる家根の隙
春雨や木下にのぼりぼりぼり
ぼうぼうとけぶりて柳うれ
八九つ面ゆふやゆふ武
うれしさうな柳のもへふ

後の小文と苦法あと
題ばかりそなへよとてふ
法如うれとばかり
ばこ見てそこと

蛍火の消えるや橋寿
のうへすまの屋敷や梅柳
梅柳うるうるのうれしさの面
歩むうまうまて花入柳まもる樹
阿弥は我宵ふるる弟子の面
うるうるの笠胡の系ばかり星
文ばかりの阿弥言ふ乃上
おれ是ばかりかまくらの一二寸
花のうる鐘を上野浅草

よく移して
花さかるまゝ
當城のあるじ我
相模殿
御子の桃童
幸嶺の松をこそ
らへ望て花ふかきを待
人〳〵幕うちはいれたる
中あるうち
松陰をうしなて

四月文器より持り出る花見古歌
又和の國
花の傳
伊賀より
奈良の八重桜より料
りゆかれて
一里ゝ
の家人の
檀の木乃
家の

桃まつ三石負素堂ら
句し

[illegible]

いよ日ら花に入れて湖せさ[illegible]
ひすあ[illegible]
古句去別ゆ也及人四[illegible]
[illegible]

[illegible]七日花[illegible]

東行餞別

[illegible]

露治[illegible]

[illegible]養もかりんと花せ[illegible]

伊勢神宮楽

[illegible]水の[illegible]

二見北図[illegible]

[illegible]潮[illegible]浦[illegible]

[illegible]花と[illegible]

[illegible]無[illegible]

花ふ[illegible]無[illegible]

[illegible]泉

[illegible]七[illegible]

物皆自得

[illegible]

蝙蝠も出よとまぶれば花の雨

一 [illegible]たる僧もこうるる花の雨

[illegible]

[illegible]の[illegible]も上戸はさぞせん

酒の[illegible]ふかふかとんとうふ酒の[illegible]

憂方ニ知レ酒ノ聖ヲ貧人

覺レ錢ノ神ヲ

一 花ゆゑ我酒少く食ふ

一 種芋や[illegible]さうに我[illegible]

小文庫より[illegible]と上五より[illegible]

一 水汁も能[illegible]

一 素の[illegible]

[illegible]

[illegible]中[illegible]

[illegible]

山櫻[illegible]

櫻狩[illegible]

一 [illegible]

故主蟬吟ぶ庭前[illegible]

一 [illegible]事[illegible]

山家

鶴尾巣には霞の巣とてへるま

鶴は巣に入りける杜家の櫻かな

西口より廿余程隔て故人の宅

命ありて川中に浮ぶさまよひける

加州白山奉納

うらや清らかも世はかくもありき

奈良七重七堂伽藍八重櫻

都には似ても似ぬ也歯よ吟客海苔

艸の枕に寐あきたまさ往けり

くさ中に濱の上にまかり

明ぼのや白魚白きこと一寸

鮎は子の盆に白きあはれなる

蜆子讃

志ら異也見さき目我明清の細

伏見西岸寺任口上人に逢て

仁我まゐし伏見の一

我衣にふしみの桃の雫せよ

草庵より桃櫻ありけり門人に

其角嵐雪あり

両の手に桃と櫻や草の餅

内裏雛人形天皇の御宇とかや

松嶺の月見やうのうまてを信
まうを人うゑをまうをうの遊
稲荷

白毛戸も住なるべきを離の家

書柳の陰よりたるく汲干す

永き日我嘯をたゝ思ひの葉哉

茅中の物をつゝ食嘯や雀

雀なるうをやまをつゝ小鳥哉

花ちる時中は拍子雀の夢

さうなる沙弥の蔵

苟のゆゝ文よ晴嵐を題
えてうゝふやうゝ
ゆうを

言野まて

文毋ゆきをまをに意し雀子の夢

蛇ふふと呼を拍子雀子哉

雀子と嘯うゝを風雲の巣

塚の花ちるを壁中の日影哉

起きゝ我ゝ友よせんなる小蝶

古池やかゝ毋ゝ子音

這出よかいやゝ下毛ゝの夢

二股よ毋ゝ稲ゝ麻ゝ角

同友ゝ素らまてゝ

麻の角先一畝乃蒔ける

猫付書寓の前ふまうけ

麦めしに屠つる音也猫乃書

猫の恋やもれ聞乃鶏月

山路来て何やら床しすみれ草　芭蕉

書屋の縁程こそ屠つる時の猫乃

恋しうのいつもこそ

見ぬふるや

ささ蟹集こ林檎の

白こて義の脇ひ

悼　呂丸

遠仏よりなのれい塚の草枕

古畑に蒙ける男とも

いろく乃ふ絵り〳〵素乃夏

木乃ま情宮也生ぬく素ぬ等

弱ふれたまおつまよ石咲恒孫ふ姫

夏の小丈山のふるさと　　吉提山

山寺ぬ鶯さけよ蕨乃

業ましけよ三見彩る雀乃

古りふる花の文ふ自撰姫

淋しいけて生活千鶴けく女

天和乃狩の時

笠卵ふ宿ふけ茂乃家

山吹如宮活共蛤炉ぬ時

浮ふふ乃ふ鶯の音

山映の寒潮の春せよのちち新なる是

望湖水惜春

以春惜の人を行くを見る

前途三千里はるかひ獨り

ふさうらて行のちまさよ新なる

のふるさとをうるを

行春や鳥啼魚目に泪

行春や新緑の浦まで追ふ

二月十七日神洛を出るとき

まるふるさと夜更て嵐ふく

子を抱くと中人みまを初の旅

なるさ涙のうるまてうれたよ

神殿のみまを拝を今も

叡慮まを賜ふ民せ宝竜

追加 白選彫刻は未見聞の白找
拾ふて追加の例とす

[illegible] 墟

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鶴の巣もあるべき花は柔越の
阿蘭陀もとゝ作よ茅ふいの下の小鶴
卅藏は瓦ぬきて海うん白樓

富士に行[illegible]もかれ家に出川
[illegible]に水こぼしあり[illegible]

夏之部

[illegible]川[illegible]後にかはる衣かへ

日光にて

[illegible]と書[illegible]日の光
[illegible]して[illegible]自[illegible]下[illegible]
[illegible]

[illegible]にかと[illegible]

[illegible]

藪椿門に[illegible]

芳舎の画讃

蒲[illegible]

逢龍尚舎

[illegible]の小文芦の[illegible]

[illegible]名を先[illegible]の[illegible]

藤の[illegible]海より[illegible]

[illegible]岸[illegible]奥[illegible]

木啄も庵は破るな夏の月

須磨の浦一見の時

須磨[illegible]明[illegible]下闇

幻住庵にて

先[illegible]の[illegible]椎の木も花[illegible]夏の立

[illegible]も[illegible]

山時雨[illegible]旧跡

[illegible]

今[illegible]

牡丹葉[illegible]

[illegible]自画自賛

[illegible]牡丹[illegible]花の蜜

[illegible]柳の及[illegible]

[illegible]大顛和尚[illegible]睦月

[illegible]

[illegible]

先ころ五十有余の中より候

櫻にて卯花も挿木のあとにかな

奈良まで

灌佛の日に生れ逢ふ鹿の子かな

日は花や蓑うちかくる雨

野を横に馬引むけよ郭公

鳥籠の憂目見つらんほとゝぎす

木がくれて茶摘も聞やほとゝぎす

須磨の海士の矢先に鳴か杜鵑

此句集に京にて考へ
京なつかしとあり

京にても京なつかしやほとゝぎす

第三に此句両評之
考へし

一声は江に横ふやほとゝぎす

ほとゝぎす声横ふや水の上

郭公正月は梅の花咲り

清く聞ん耳に香焼て郭公

ほとゝぎす裏見の滝の裏表

子規大竹藪をもる月夜

ほとゝぎす消行方や嶋ひとつ

ほとゝぎす鳴々飛ぞいそがはし

郭公鳴や五尺のあやめ草

不卜一周忌琴風興行

おもく見須磨の古記硯箱
うら枯も寝ひとりやせよらんと鳥
とんぼうもとゞまるや雨乃花曇
蘿榜舎
柚の花よむしろ我恐ろ料理間
浦士ゐ笹生んてくるや川の端
贈杜國子
宗牽に羽をくゝ螺ゐちとも留
嵯峨田の螢見
おくとろくの也そは醉て咲ゐ来る

什文執筆

愚かにも蓑虫つくる螢かれ
草の葉も落るまゝ飛螢かな
匹もや我末に螢や言乃霜
我か庵よき故のならなきを絶えかね
ことは境をいひ初ることは
きこの事すや
蝸牛角ふりまはせと須磨明石
かの歌人の旅よりも前へ
とはじめ書かれた封人の家を
見るまで合書をまかせ三日風翁

なれてうのき山中又遠国の
はて尿さき家拾ひ
雑り紀の紅葉ぬさ
ふりさけ見ぬ人の紅葉ぬさ
ふりさけ見ぬ人の紅葉ぬさ
ふりさけ見ぬ人の紅葉ぬさ

竹曜日

傍らもとも乗換る日を養と笠
奥州今はたちかつ川と生る
早苗ふる高ら高き日数ふる
吉野ふ摺の石を踏て
きさかへるもの山の摺

炎日乱文入集すれども
伊毋の句ハ一句の内
ひろく後と句数集ふ
ひろく後人多句まし

淋しさと風ふきさる田うへ歌
清水あるうへは奉芳野里
なりて田の畦く残ほ

田一枚うへて立さる柳かな
風流のうへ多也奥は田うへ
名護屋にて

世我旅ふ代くふ田ん彩度り
五月雨にかくれ田ん彩度り
さうへ植也奉わつふ素の畑
髮ぬきて宮詣さうへ

[illegible]

文井川[illegible]出て沼田塚本氏の
[illegible]

一、五[illegible]面[illegible]破[illegible]大井川
仏人堂[illegible]立[illegible]
永[illegible]

一、文[illegible]我[illegible]家上川
経堂[illegible]三尊の像を[illegible]堂
三代[illegible]を[illegible]仏を
安[illegible]

一、[illegible]仏像[illegible]堂
洒[illegible]堂頽破

一、笠[illegible]川[illegible]乃[illegible]
[illegible]根の廟越て
国[illegible]時[illegible]
[illegible]我[illegible]太刀[illegible]
[illegible]什物[illegible]
[illegible]太刀[illegible]紙幟

伯[illegible]集[illegible]家[illegible]舎[illegible]
[illegible]紙[illegible]

[illegible]

[illegible]

二足陸[illegible]

[illegible]

葛籠州　足[illegible]

[illegible]

正成の像鉄肝石心此人の情

なるべし[illegible]

國[illegible]

[illegible]

[illegible]

殺生石

石の[illegible]

[illegible]

眉[illegible]を[illegible]

己百亭

[illegible]

陸奥[illegible]

[illegible]

みちのく旅立けるに那須の黒
羽といふ所に翠桃何かしの住ける
を尋ねて深き野を分入る
程道もまかふはかり草ふかけれは

秣負ふ人を枝折の夏野哉

人々川さきまで送りて餞別
の句をいふその返し

麦の穂をたよりにつかむ別かな

甲斐の国山家に立よりて

行駒の麦に慰むやどりかな

伊豆の国蛭か小嶋の桑門去年
の秋より行脚しけるに我
名を聞て草の枕の道つれにも
と尾張の国まて跡をしたひ
来りけれは

いさともに穂麦くらはん草枕　桃

素はつや菜隣の穂を出つらん

苣はまつ青き葉あるも茄子汁

重行亭

めつらしや山を出羽の初茄子

蕣ちるをかけてのれん蔭ハ
宗祇の歌しに白山て
蕣の実ハ誹諧にせんとたのしむ
様にも実にも花ともなき蝶にも世捨る
家隠す子やは脩子晴にも蕭々ぐる変
あちらも蕣を小庭の出座敷
象潟の雨や西施か合歓の花
許六か木曽路におもむく時
旅人乃心にも似よ椎の花
寒からぬ文字を西の木とかて
西方浄土に便ありと行基
菩薩の一生杖にも柱にも此
木を用ゐられしとかや
世の人の見付ぬ花や軒の栗
露川か筆をもて居遠にて
とまよかるま庵便
水鶏鳴くと人のいへはや佐屋泊
大津湖仙亭
此宿も水鶏もしらぬ扉かな
やかて死ぬけしきは見えず蟬の声

撞鐘も聞くやうなり蟬の声

山形領立石寺にて

あらとうと佳景寂寞として

心すみ行のこゑ

閑さや岩にしみ入蟬の声

蟬亦一石一佛の像と

蟬

閑かさやたのもん人の草つき

月の石夜泊

蟬声やまかあれ三度七月

夜の月叩油うる出る赤坂や

丈井川渡て鏡ヶ宿の夜の

月もあれと雨もの哀し渡の夜

雲の峯いくつ崩て月の山

湖や暑を忘れて涼しかな

六月や山を越来て笠の内

清涼寺にて

丈山の像

雪の峯こゝ迄来ては拝まばや

小倉山

麦杉をおもひも尊さ無き青
風の花にはいつはりなき州
夕ぐれや鞘のなつかしき所の声
花とたえしよ夜に風のさそふかな
まつ川に落葉芥をもさそひ捕ちやん
柳ちりて浮屋に濡れて住ん落葉
高よ川二つふたつわたし落葉かな
風の波もしみにしみら蓮き蛍
山陰や見捨られん冬かな

治和集文化の土 ゝ句ゝ生

朝露をまぬかれて涼し風の流
子をきゝて夏嵐咲かぬ冬むらん
黄昏に鶴のうらみも蔵せしもの床の上
初嵐蓮さへ莖つ折られ涼しさ衣かな
夕嵐の笠捉へ後架に汲ば福かな て
世の中や鉦を以後の物語
夕皃や醉て嵐をしつ宗也究

岐阜にて

揺りかへてやうて鮮き鵜舟哉
名もしあつる鵜闇といふもの

そらにはきんと幕掛ていさよひの
ゆきかけし人に稲つかた抜けし小
鷹狩のいくへ里をこえて
海こそみえれ夜の流れ川の鮎鮨
おほかたは小松の上の鵜の鮨
如何
林魚うる主いかなる人をあはれまん
鎌倉の生て出けん川鯉
岳あつまるも鯛まくのまじとも鯵鯵
箕の香そよ自然のまかり涼も面も鼻

涼しさを海へ入れたる
こゝろ

あつき日を海にいれたり最上川

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

岐阜山

城あとや古井の清水先問ん

異に汐こしやとも

清瀧の水汲ませてやところてん

其人に小袖も今や土用干

晋渕吟をうらやむ

窓ならまし書窓は書きし筆

野明亭

涼しさを絵にうつしけり嵯峨の竹

すゞしさや木の三日月に柱嵐山

涼しさや我宿にして旅すまゐ
　野水新宅
涼しさや我か旅の寝ころ哉　鳥宿
　宿を思ひ定めて人はなし涼しさ
涼しさは何国も同し住居哉
すゝしさや雲の松の枝ふる秋
　仁目不足書
　四ツとも
浮世あると思ふこの目に見る涼
涼しや鶴の脛ぬれて涼しき
　西行櫻
夕晴やさそふに涼し波の音

まとめすゝしきの袖にすゝみゆく
川中の根木よ涼しさの
磨彼風も入見る涼夕涼
川風やとまりあふ也見る又涼
飯あふく鳴ゝ雑遊も四ふ涼
彼岸の日の新ゆかたに又涼
　酒田の涼よ下る渕菴亦雲
　以下医師の許に宿を原
ゆつらの鳴ぬる浦かけて又涼を
　木節亭

秋のうれしさ
行せ我
夜の秋せ
掘うまれの二木我三月越
夜衣いう
夏山と芝
うつせ
語まも

追加

曹子一冊追善

卯月なれも冊子宿を冷しま
甲斐山中

山賊のうつ四国るまうつ
けれ鶯笑
自然せ晴雨乃花は咲つん
牡丹ゑ乃
豊ゑれて首

夕霧ふかん初雪は降ぬらん